

令和2年度 葛尾村立葛尾小学校だより



きずな

令和3年2月24日 NO.33

葛尾小学校長 伊藤 恒明

重点目標 Let's try! 自分を信じて レベルアップ!!

<https://www.katsurao.org/site/es>

さぶん賞受賞作品紹介

学校だよりNo. 32でお知らせしました通り、令和2年度のさぶん賞を受賞した作品を紹介します。

全国表彰【さぶん環境賞受賞】

水生昆虫

3年 児童

ぼくのすんでいる葛尾村には、野川川と葛尾川が合流して、高せ川が流れている。ぼくは、水生昆虫が好きで、ぼくの家をわきを流れている野川川で、二年生の時から水生昆虫をつかまえ、かんさつしている。長くつをはいて、川のまん中までいき、草の下をあみですくったり、石をひっくり返したりして、つかまえている。タニシが一番多く、ヤゴ、ミズカマキリ、カゲロウの幼虫などがとれる。一番つかまえて、うれしいのは、ミズカマキリ。タガメににいて、かまの形がカッコよくてすき。

水生昆虫をしいくするのはむずかしい。早いものだと一週間もたたないで死んでしまう。今まで一番長いきしたのがギンヤンマのヤゴで半月ぐらい。理由は三つある。一つは水。水そうにためた水や水道水だと、水温が上がったり、薬が入っていて、虫にとってはどくになったりするからだ。二つ目は、水そう内のかんきょうで、土がにごるとどろ水になり、はげしい動きをすると、エサがみえなくなるからだ。三つ目は、エサの間だ。カゲロウの幼虫が一番いいのだが、カゲロウの幼虫は土の中にもぐってしまいヤゴはエサを食べられない。本当だと、人間がピンセットでヤゴの口の前につき出すといい。だけど、ほかの昆虫のせわがあるときは、ほかのケースに入れて、エサを食べさせる。

今年、はじめて自分の力で、ギンヤンマのヤゴをつかまえることができた。とてもうれしかった。でも、このまましくし続けると前にもらったヤゴのように死んでしまうので、元いた田んぼににがした。

田んぼには、コオイムシがうじゃうじゃいる。コオイムシは3~4センチメートルで、おしりにこきゅうかんがあり、タガメのように、かまの形が同じで、体の形もにている。水そうでかうと、えさのとあいであらそいして強いものだけしかエサをたべれないので、しいくするときは、大きさが同じものを2~3びき入れてかうといい。

葛尾村にあるニットせいひんを作る工場の梅ざわさんによると、「葛尾村の水は、ちょうなん水で、高きゅうなニットせいひんをつくるのにとてもいいんだよ。」

と、言っていた。この水が水生昆虫にとっても生きていくにもちょうどいい。

ぼくは、これからも水生昆虫をつかまえて、かんさつすることがすきななので、今のままきれいな水でいてほしい。

福島県表彰【葛尾村教育長賞受賞】

川の精れい

6年 児童

私はカワネ。小学六年生。私は川の精れいを信じている。川の精れいは、この村に古くから伝わる川の守り神。この話を聞いたのは、私が6歳のころで、おばあちゃんに教えてもらった。その時から私は、おばあちゃんが見たことがあるというその精れいに、私も会ってみたいと思った。昔は家のうらの川でよく見かけた精れいも、最近は見なくなったとおばあちゃんが言っていた。どうしても精れいに会ってみたい。

精れいを探しにいえのうらの川に向かったのは夏休みの終わり。私はわくわくして、川の周りを探した。川ぞい、草の間、土手の上。もう少し上流にも行ってみた。けれど、探しても探しても精れいは見つからなかった。そのかわりいくつものゴミが落ちていた。時間も遅くなり、しかたなくその日は家へと帰った。次の日、また精れいを探しに川に出かけた。それでも見つけたのはゴミばかり。3日目、明日は始業式。夏休みは今日が最後。私は精一ぱい探した。けれど、やっぱり精れいは見つからない。

「やっぱり精れいなんていないんだ・・・。」日もくれ始めた。あきらめて帰ることにした。

空は夕焼けになり、うっすらと赤くそまっていた。もうすぐ真っ暗になるはずなのに、帰り路はなぜかみょうに明るくて、なんだか不思議な感じがした。すると、何度も探した場所なのに、みたことのない石だたみの道を見つけた。気づくと、さそわれるように私はその道を進んでいた。どこまでもどこまでも続くような道。

「あなたがカワネさんね。」

無意識のように歩く私に不思議な声が聞こえてきた。はっとして周りを見たけど、だれもいない。そして、その声は耳にというより、私の心に聞こえるようだった。

「もしかして・・・精れいさん。」

「そうよ。ずっと探してくれていたのに、姿を出せなくてごめんなさい。」

精れいは、私が探していたことを知っていたんだ。でも、

「どうしてあらわれてくれないの。」

「川にゴミがあって、陸にあげられないの。」

そういえば精れいを探しているとき、ゴミがあちこちにあった。川がよごれているから精れいと会うことができなかったんだ。川を私達人間の手でよごしてしまったことに、ごめんなさいという気持ちでいっぱいだった。

声が聞こえたのはその時だけだった。いつの間にか元の道で、夜になろうとしていた。結局、精れいに会うことはできなかった。でも、まちがいなくはっきりと聞こえたあの声。それから私は、ゴミが川の近くにあったら拾うようになった。もう声を聞くことはないけれど川をきれいにするたび、「ありがとう」と言っているように感じる。でも、おれいをいわれることではない。私達人間がよごしてしまった川は、私達人間がきれいにしなければならぬから。